

「研」九月号 「俳句往来」 梅津大八

▽「稲」 7月号

春風やベンチそはそはしてゐたる 山田真砂年

春だ、とそわそわしているのは勿論作者だが、ベンチにしてみても、子供らがかけてきて賑やかに押したり引いたりたいたたりされたり、はたまた年頃のペアがそつと寄り来る舞台となるか、気が気でないことば、詠まれたとおりなのである。

夕桜みんなどこかへ行く途中 今井 基

みんな忙しそうに夕桜の脇を通り過ぎる。なんだ夜桜に集まって、一杯やろうというものはないのか。ただ、途中なのである。やはり屋内外問わず、どこかへ繰り出すことになるという予感化する。

菜の花の丈の不揃ひみな揺るる 大坪 正美

きれいな菜の花畑も、よく見ると一本一本、丈も咲き具合も違う。それがみんな揃って一斉に揺れて、香ってくる。それが菜の花畑だ。小さな景から広い景が見えてくる。

さくらさくら振り向くたびに散りにけり 沼田 布美
ずっと散っている桜だが、気のせいか、振り向いた時だけ、あ、また散ったと思えてくる。いや、振り向いて、さくらさくらと呼んだので散っているのである。きっとそうだ。